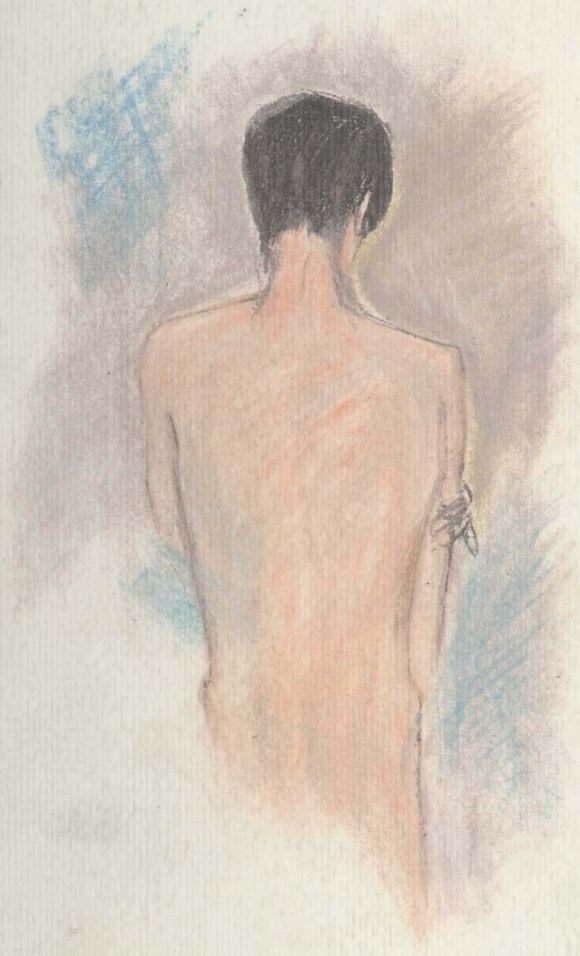


ため息の時間

連城三紀彦



ため息の時間 いきみじかん

一九九一年七月一〇日 第一刷発行

著者 連城三紀彦 れんじょうみきひこ

発行者 若菜 正

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五―二〇
郵便番号 一〇一―五〇

編集部 (〇三) 三三三〇―六一〇〇

電話 販売部 (〇三) 三三三〇―六三九三

製作課 (〇三) 三三三〇―六〇八〇

印刷所 大日本印刷株式会社
検印廃止

乱丁・落丁の本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替えます。本書の一部あるいは全部を無断で複写、複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

父息の時間

連城三紀彦

『リリアン』

1

子供の頃、僕はリリアンを編むのが巧かった。

リリアンというのは糸を何本か使って一本の紐を編みあげる、ちょうど組み紐を小型化したような器具で、どれぐらい小型かというと大人の中指ほどの長さで太さの筒型の器具……いやさらに中指を二まわりほど拡大したぐらいの大きさはあっただろうか、でも僕はあの人膚色（ひとかわ）の木製の器具に今も大人の指を連想してしまう……そしてその器具と呼ぶより玩具と呼んだ方がいい簡単な木の筒には先端部に釘が何本か覗いていて、糸を鉤針でその釘に引っ掛けながら、蜘蛛の巣を編みたいに幾何学模様を織りなしていくと、筒の穴から下方へと編まれた一本の紐が垂れ落ちていくという仕掛けだった。

もちろん女の子たちの遊びだった。編みあがつた紐で髪を結んだり、長く編んだのをベルトのように腰に巻きつけて得意げに見せびらかしていた女の子もいたから、ただの遊びではなく多少の実益も兼ねていたのだろうが、僕の場合は完全にただの遊びだった。

ただの遊びというよりもっと意味のない、ただの時間つぶしだったのかもしれない。

二十何年前のその頃は、今よりずっと時間が緩やかに流れていて、特に僕には他の子供よりたくさんの、ゆったりとした大陸の河みたいな時間の流れがあった。僕は体が弱くて他の子供たちのように外で遊びまわったりすることができなかったし、体のためによく学校を休んで一日中布団の上で過ごすことが多かったから。

いつリリアンを覚えたのかは忘れてしまった。最初にそれを手にした時のことも、誰から編み方を教えてもらったかも……僕が憶えているのは小学校三年生頃のある雨の一日だ。季節も正確には憶えていないが、夏の初めか冬の始まりか、どちらかだった気がする。その日のことを思い出すと、ふっと淋しい灰色の霧のようなものに気もちが包みこまれてあの時窓を伝い落ちていた雨が氷の雫のように冷たく感じられてくるし、その逆に熱い湯気か煙のようなものに気もちが包みこまれて、あの時の雨が熱帯のスクールを日本風の温帯に薄めたような、汗と区別のつかない生温かな滴りのように感じられてきたりするのだから……ちようど風邪をひいた時のような、熱さと寒さとが背中合わせに混ざりあった不思議な温度が、思い出すその一日の雨にはある。

實際いつものように心臓が苦しくなったからではなく風邪をひいてその日学校を休んでいたのかもしれないし、僕が布団の中に半ばもぐりこみ、横になったまま手だけを動かして編んでいたリリアンの二本の糸の色のせいなのかもしれない。リリアンの糸は一本の中にいろいろな色が派手に染めこまれているのだけれど、その日僕が使っていた二本のうちの一本は赤やオレンジの暖色系でもう一本が青や水色の寒色系だった……

雨音のせいで布団の中の闇に流れている時間はいつも以上に間延びし、長ったらしく感じられ、僕は他にすることもなくただ指だけを動かし続けていた。

僕は自分が砂時計になったような気がしていた。一生ぶんの時間が計れる砂時計は絶え間なく細いすじをひいて砂を流し落とし、僕は自分の指から流れ落ちていく砂が、二本の糸の中に織りこまれ一本の紐を編みあげていくような気がしていた……

朝から晩までかかってどれだけの長さの紐を編みあげたのかはもう憶えていないし、その日に起こったのはただそれだけのことだ。

僕はその日一日、雨音を聴きながら布団の中で指を動かし続け、使い道のない、棄てる他のない一本の紐を編み続けていただけだった……それなのに二十何年かが過ぎ三十一歳の終わりに近づいた今ふり返ると、それが僕の人生を決定した一日だという気がしてくる。

僕は今本当は三十一歳ではない。あの日、リリアンの糸を通して時間と戯れていたあの日の八つか九つの僕なのだ。あの日リリアンの紐の中に一生ぶんの時間を編みこんでしまい、僕に

はもう人生で使える時間が一秒もなくなってしまったかのようにその後僕は少しも成長せず、
今も八つか九つのあの日の幼い顔をしている。

そしてたぶん僕が去年あんな事件を起こしたのは、僕の中に雨音やリリアンの色とともに残
ってしまつたそんな幼い顔のせいなのだ。いや、それは事件と呼ぶほどのことはない、僕とセ
ンセイとその奥さんとに起こつたただの小さな恋愛物語にすぎないのかもしれないのだが、八、
九歳の顔しかもっていない僕にとっては、それは衝撃的すぎる一つの事件だつた。

その事件が起こる少し前、僕がセンセイにただリリアンを編み続けた幼い頃の雨の一日の話
をした時、センセイは、

「ふーん、それがお前の性の目覚めなのか」
あまり関心もなさそうな声で言つた。

真実というのはだだっ広い壁に似ていると考えることがある。絵やポスターを飾らなければ
殺風景すぎてサマにならない……そう考えるのはたぶん僕が画家だからだろうが、ただの何も
ない無彩の空間は僕には壁には見えない。壁画とまではいわないまでもせめて十号ぐらいの絵
を飾らなければ壁は壁にならない。

去年僕が引き起こしてしまつた出来事の真実を、僕は今月から一年にわたつてこの雑誌に書
こうとしているのだけれど、壁にいくつかの装飾をつけ加えなければ却つて真実を伝えられな

い気がしている。

既にもう僕は二枚の小さな絵を壁に飾った。

僕の年齢は実際には三十一歳ではない。それよりもっと年長なのだが、そんな年のいった男がこれから書くような恋愛事件を起こしたとなると読者の多くはただ気味悪がってしまうだろう。僕が引き起こした恋愛事件は決して気味悪いものではないのだから、実際の年齢を書くとは僕は真実を伝え損ねてしまうのだ。三十一歳という年齢は、現在の顔にまだ子供の頃の幼い顔を残していてこんな事件を起こしてしまったとしても不自然ではない、ぎりぎりの年齢のように僕には思えるのだ。

同じように僕は実際には画家ではない。しかし僕が実際の職業をここに書いてしまうと読者の何人かはきっと僕が誰なのかに気づいてしまうだろう。いや僕自身は去年の僕の恋愛事件が世間にバレてもいっこうに構わないのだけれど、僕が誰なのかがわかってしまうと僕が「センセイ」と呼んでいる人が誰なのかまでわかってしまう。センセイはちょっと冷たい印象のあるその顔からは想像もできない傷つきやすい性格をしていて、傷つきやすい人の多くがそうであるように虚栄^{みえ}つばりでもあるから、世間的な傷を負うのが特に嫌いなのだ。イラストレーターをしているセンセイは以前自分の作品で盗作問題を起こしたことがあって、それは結局簡単にセンセイの責任ではないことがわかって大した騒ぎにはならなかったのだけれど、その問題に巻きこまれて二、三日の間、センセイが細い金属フレームの眼鏡の背後の、レンズよりも

冷たく見える目を氣弱そうに伏せていたのを僕は知っているのだ。

それに僕はセンセイを傷つけることだけは避けなければならない。なぜなら去年僕が起こした恋愛ドラマは、結局僕がセンセイを傷つけまいと必死になりすぎたあまり、結果的にセンセイを何より傷つけてしまったというドラマなのだから。

それにまた、センセイがイラストレーターをしているというのももちろん僕が壁に飾ったもう一枚の絵なのだけれど、僕が画家でありセンセイがイラストレーターであった方が、僕たちの実際の職業よりも幾らか僕たちの関係に似合うのだ。それが何故なのかはこの連載がもう少し進んだところで書くことにして……だから同じような理由で僕はまた自分の本名を「平野敬太」と変え、センセイの名前を「辻井秋一」と変える。ただ本当の名前がわかってしまうのを恐れているだけでなく、僕の本名は重苦しすぎて、一見複雑すぎて重苦しそうなのに実はスケッチ画の軽いタッチで僕が描き続けた去年の物語に似合わないし、センセイの本当の名前の方は逆にその物語に似合いすぎて、読者は却って「嘘」を感じとってしまうだろう。

ただしセンセイの年齢だけは「去年のその時四十一歳だった」と事実を書いておこう。既に僕はセンセイの風貌をかなり歪めて別人のように書いておいたから四十一歳という年齢だけではそれが誰なのかはわからないだろうし、センセイが四十一歳だったということはあのドラマを僕が起こした一番の原因だったのだから。

センセイと僕とが初めて出逢ったのは去年よりさらに六年前にさかのぼる。出逢って三年も

過ぎる頃には、僕は、大学生から老人まであらゆる年齢層の友達をもっているセンセイの三番目ぐらいの友達にはなっていたし、センセイは友達の少ない僕の一番目の友達になっていた。そういう関係が去年のその日まで実は三年間続いていたのだが、センセイが三十九歳だった時にも四十歳だった時にもそれは僕に起こらなかったのだし、今年に入りセンセイがもう四十二歳になった今ならやっぱりそれは起こらなかっただろう。

桜が雨に流れて春が終わるのなら、去年の四月東京に春の最後の雨が降っていたその日、センセイが四十一歳だったことが僕にそれを引き起こさせてしまったのだから。少なくとも僕は何故それが自分に起こったのかわからないまま、あの時、すべてをセンセイの四十一歳という年齢のせいにしてしまった……

連載の第一回目を、いったい僕は去年のドラマのどこから始めたらいいのだろう。

読者の方たちの興味を惹くためにできるだけ刺激的な場面から書き始めた方がいいのではないかという下心が僕にはある。最も刺激的なのは、去年の夏の日、正確に言えば八月十二日、今年になってから僕が「僕の終戦記念日」と呼んでいるその日の出来事だろう。

その二か月ほど前からセンセイは僕が住んでいる部屋から歩いて五分ほどのマンションの一室に仕事場を借りていた。その日僕は昼すぎにその仕事場を訪ね、チャイムを鳴らしたが返答がなかったのでセンセイから貰っていた鍵で部屋のドアを開けた。僕の部屋の前の家が改築中で工事の騒音で仕事ができないと言うとセンセイは自分の仕事場の鍵をくれ、自分が家に帰っ

たり留守をしている時はいつでもその仕事場を使つていいと言われていたのだ。センセイは留守ではなかった。チャイムに応えなかったのは、センセイがその日明け方まで新宿で飲んでいて陽盛りのその時刻にまだベッドに倒れて寝こんでいたからだ。そつと寢室の襖をあけると、ベッドから床へセンセイの長い脚の片方が流れ落ちていた。いつものように服を着たままベッドに倒れこんで寝ているのだ、そう思った。いつものように掛け布団を抱きかかえて……いや抱いているのは布団ではない……それに気づくと同時に僕は襖を細心の用心で音をたてないように閉め、足を忍ばせて部屋を出ようとした。玄関に、センセイの乱暴に脱ぎ棄てられた靴があり、裏返つたその靴の片方とぶつかつて白いハイヒールが倒れていた。僕はセンセイがその仕事場に奥さん以外の女たちを連れこんでいることをよく知っていたのだし、何故部屋にあがる前に女がいるかないかを靴で確かめなかったのだらうと後悔しながら自分の靴をはこうとした。

その時、寢室の襖が開いて、

「なんだ、来たのか」

センセイの面倒げな、投げやりな、灰色の聲が聞こえた。寝起きだったからというわけではなく、センセイは酒を飲んでゐる時以外いつもそんな今起きたばかりのような声をしている。ふり返るとセンセイは、いつもの材木になり損ねた木のような体で細長く立っていた。

「逃げなくてもいいよ」

とセンセイは言つた。

「でも——」

「……寝てるの、ウチの女だよ」

センセイは自分の奥さんを「ウチの女」と呼んでいたのだ。センセイは流し台に屈みこんで水を一杯飲むと思ひだしたように僕を見た。面倒げな、投げやりな、灰色の目だった。これも寝起きだったからというわけではなく、センセイは酒を飲んでゐる時以外いつもそんな今起きたばかりのような目で僕を見るのだ。僕が誰なのかわからないと言いたそうな目で——そしてそんな目で見られるいつも僕は自分が誰なのかわからなくなってしまうのだが、その時は特にそうだった。僕は自分が何故その部屋にゐるのかもわからなかったし、センセイが他の女を抱いてくれていた方が良かったんだと何故そんな風に胸の中で呟いたかもわからなかったし、何故「ウチの女」という言葉に自分が傷ついたのかもわからなかった。

僕は二か月前からセンセイの奥さんを愛していることも忘れ、そんな自分を他人のように感じながら、その場に突っ立ち、僕の方でも相手が誰なのかわからなくなつたようなぼんやりとした目でセンセイの目を見返していた。センセイは依然、面倒げな、眼鏡をかけてゐるのに眼鏡をかけ忘れてゐるような灰色の目で僕を見ていた。その目は僕の何も見ていないはずなのに、僕が体の奥底に二か月前から誰にも見つからないようにしまひこんである一つの気もちだけは見ぬいてゐるのだという気がした。そして実際、僕が奥さんを愛していることに気づいてしま

ったかのようにセンセイの方から先に目を逸らした。半分ほど開いた襖から寢室の窓だけが見えた。閉じたカーテンを突き破るほど激しく、僕の足の指先まで震わせている心臓の音より騒がしく、真夏の光が窓に溢れていた……いや……

流れにまかせて僕は去年のドラマを唐突に語り始めてしまった。去年の一連の出来事のうち最も刺激的だったというのは実はその晩その寢室で起こった出来事なのだが、このままその場面へと突入していったら、逆にその場面がいかに刺激的かを読者に伝え損ねそうだ。第一回目から何の説明もないままその場面を書いたら、読む人にそれが最も刺激的でありながら同時に最も美しい場面でもあることを巧く伝えられないだろうし、それどころか、去年のドラマがただの薄汚れた、卑猥で不道徳で退屈なだけのドラマだと誤解されてしまう心配がある。事実それは、薄汚れた、卑猥で不道徳で退屈なドラマだったのだから。ただしそれだけでは決してない。その卑猥さと不道徳とを一年かけて発酵させて、今一つの小さな、小さいが確かな真実が僕の中にある。その真実をわずかでも読む人に伝えるために、僕はもっと自然でもっと効果的な最初の絵を壁に飾らなければならない。

フライングに気づいたのだからスタートラインに戻らせてもらおう。僕はやはりその二か月前、僕が初めてセンセイの奥さんに逢った日から始めるべきだったのだ……

その日の午後、僕はセンセイが住んでいる横浜に出かけた。センセイが東京に仕事場を借り

ることになったので、僕がお祝いに仕事場におく机を買うことになったのだ。

横浜の元町にセンセイの奥さんの知り合いが経営している家具店があり、輸入物の家具が原価同然で買えるというので、センセイと奥さんと僕との三人で見に行くことになっていた。

東京を出る時にはショパンの「雨だれ」そっくりに優しくもの憂げに降っていた雨が、横浜に着く頃には嵐に似た激しさに変わっていた。石川町の駅でセンセイは所在なげに突っ立って、僕を待っていた。いや僕を待っているというより、誰かを迎えに駅まで来たのに誰を迎えに来たのか忘れてしまつて放っておけば相手の方から声をかけてくるだろうといった、いつもの無責任な無関心な待ち方だった。一人だった。「奥さんは？」と僕は訊いた。

「外……車で来たから」

一言だけ言うと、さっさとひとり傘もささずに雨の中を駆けだし駅前に駐まっていた車の助手席に乗りこんでしまった。傘だけはさしたけれど、僕はひとり置き去りにされた恰好でその車から二、三メートル離れたところに突っ立っていた。横浜の町全部を壊しそうな土砂降りの雨は、傘ごと簡単に僕をも壊してしまいうで、僕はその車に乗りこまずこのまま駅の中へ引き返し東京に帰ってしまった方がいい、そう思っていた。

僕はセンセイの奥さんに逢いたくなかったのだ。理由は二つあった。一つはその日からさらに二か月前、東京に別の雨が、春の終わりを告げる生あたたかな、同時に奇妙に冷えた雨が降っていたその日……いや……その春の最後の一日のことはまた後で書くことにして、もう一つ

の理由、その車に乗りこんだらそこに今まで僕の知らなかった全く別の世界があつて、何かとんでもないことに巻きこまれてしまいそんな嫌な予感がしたという理由からも、足を踏みだせずにはいた。

僕の場合、嫌な予感だけは必ず的中してしまう。数秒後、僕は仕方なくその車の後席に乗りこみ、ほとんど同時に予感どおりの別世界に出逢ってしまったのだつた。

「初めまして、平野です」

僕は運転席に座った女性にそう声をかけた。奥さんがふり向き、その横顔にかすかに微笑を浮かべて頭をさげようとするのを遮って、

「あれ、初めてだったのかな」

センセイが無責任に言つた。

「初めてだわ、電話でもう何回か声は聞いてるけど……」

センセイの家に電話をかけるたびに短く耳にする声は素っ気なく冷たく聞こえたし、一度だけセンセイから見せてもらった写真も、美人ではあったけれど白すぎる肌や頬を顎へと絞りこんだ線の鋭さが勝気で冷たい印象を与えていたのだが、今日の前にいる女性はそれとは別人のような優しさと柔らかさを声にも横顔にも滲ませている。

激しい雨音を閉じこめ車の中の空気は石のように固まって一ミリも動かなかつたはずなのに、その顔を包みこんだかすかに褐色味のある髪が揺れて見え、その人の体のまわりにだけ初夏の

爽やかな風が吹いているかのようだった。古典派の画家の完璧すぎて色彩までが冷たく無彩に見えてしまう肖像画が、突然印象派の画家の柔らかい光を紡ぎだす手で描き直されたような不思議な思いにとらわれながら、実際一枚の絵でも見るように僕はその横顔を見ていた。

「そうかなあ。俺たちが結婚したの六年前だし、俺が平野と会ったのもちょうどその頃だし、六年間だろ、一度ぐらいウチに遊びに来たことあるんじゃないの」

センセイはまたも無責任にそう言い、

「いいえ、ないです」

「ないわよ」

僕と奥さんは同時にそう答えた。

「六年っていうけどあなたが家にいた日、全部合わせてもそのうちの一年ぐらいじゃないの」
奥さんはからかうような声をセンセイに投げ、センセイはまた、「そうかなあ」と関心もなさそうな声で言って黙りこんだ。センセイは酔っている時以外はいつも関心のなさそうな声で喋るし、事実自分の仕事と自分の着る洋服と酒と女以外は何の関心もないようにしか見えないのだが、時々自分の痛いところを突かれると気にしたり傷ついたりしたぶん無関心を装うことがあって、その時もそうだった。センセイは結婚後も週に一日半ぐらいしか家には帰らず、残りの五日半は東京にいてホテルに泊ったり、友人や女の部屋を、それから僕の部屋を転々と泊り歩いているのだ。「奥さんはどう言っているの？　こんな風に何日も家に帰らないで」以前